

# イサム・ノグチ 発見の道 Isamu Noguchi: Ways of Discovery

2021年4月24日[土]—8月29日[日]  
東京都美術館 企画展示室

 東京都美術館  
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM



《無題》1987年 撮影：齋藤さだむ

# イサム・ノグチ 発見の道

20世紀を代表する芸術家イサム・ノグチ(1904-1988)は、彫刻のみならず、舞台美術やプロダクトデザインなど様々な分野で大きな足跡を残しました。しかし、彼はその生涯を通じて一貫して彫刻家であり続けました。晩年に取り組んだ石彫は、ノグチ芸術の集大成というべき世界です。

日本人の父とアメリカ人の母との間に生まれ、アイデンティティの葛藤に苦しみながら、独自の彫刻哲学を打ち立てたノグチ。その半世紀を超える道のりにおいて、重要な示唆を与え続けたのが、日本の伝統や文化の諸相でした。例えば、京都の枯山水の庭園や茶の湯の作法にふれたノグチは、そこから「彫刻の在り方」を看取することができたのです。

本展では、晩年の独自の石彫に至るノグチの「発見の道」を様々な作品で辿りつつ、ノグチ芸術のエッセンスに迫ろうとするものです。そのため、彫刻と空間は一体であると考えていたノグチの作品に相応しい、特色ある3つの展示空間の構成を試みます。

「価値あるものはすべて、最後には贈り物として残るといのはまったく本当です。芸術にとって他にどんな価値があるのでしょうか」と語っていたノグチ。

本展覧会において、われわれが今、希求してやまない何かをその作品は示してくれるに違いありません。

## みどころ

### 1. 彫刻家ノグチの精髓に迫る

国内外の多数の大型作品をはじめ、「あかり」を含めておよそ90件の作品が集結。一つの素材や様式にとどまらず、貪欲な造形的実験につながる「発見」を繰り返しながら「彫刻とは何か」を追求したノグチの前人未到といえる創造の軌跡を辿ります。

### 2. かつてない“ノグチ空間”の体感型展示

提灯にヒントを得て、30年以上に渡って取組み続けられた光の彫刻「あかり」を150灯も用いたインスタレーションや、折り紙などからインスピレーションを得た金属彫刻のシリーズと遊具彫刻を合わせて展示するなど、3フロアそれぞれに特色のある体感型展示を試みます。いずれも回遊型の鑑賞プランとし、かつてない“ノグチ空間”が誕生します。

### 3. ノグチ芸術の到達点・牟礼の石彫が初めて東京へ

ニューヨークと香川県高松市牟礼町にアトリエを構え、往還しながら制作に取り組んでいたノグチ。牟礼の野外アトリエで石匠の和泉正敏いずみまさとしとともに作り上げた晩年の彫刻は、ノグチ芸術の到達点とされています。牟礼に残された作品が、同所以外でまとめて展示されるのは今回が初となります。

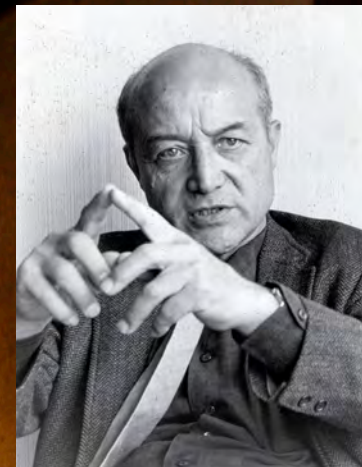
13. イサム・ノグチ庭園美術館 石壁サークル  
(数字は「広報作品画像データ申請書」のNo.)  
撮影：齋藤さだむ

## 20世紀彫刻の巨人 イサム・ノグチ

1904年11月17日(ロサンゼルス)―1988年12月30日  
(ニューヨーク)

詩人の野口米次郎を父に米国人の作家で教師のレオニー・ギルモアを母に生まれる。1927年、彫刻家ブランクーシの助手を務め、自然と通底する抽象的な作品に衝撃を受け、その教えは生涯の指針となった。建築家との協働も多かったが、広島原爆慰霊碑案など実現しなかったプランも数多い。1951年、光の彫刻「あかり」の制作に着手。山口淑子(李香蘭)と結婚(56年離婚)。1967年、香川県牟礼町の石匠・和泉正敏と《黒い太陽》(1969年、シアトル市蔵)に着手。以後、和泉は生涯に渡る右腕となり、牟礼はニューヨークと並ぶ拠点となる。1968年、ホイットニー美術館で回顧展を開催。1970年、大阪万博のため噴水を制作。1985年、ニューヨークにイサム・ノグチ庭園美術館を開館。1986年、ヴェネツィア・ビエンナーレの米国代表に選出。京都賞受賞。1987年、米国民芸勲章受勲。1988年、勲三等瑞宝章受勲。北海道札幌市のモエレ沼公園に着手するも、心不全により84年の生涯を閉じた。

丹下健三、三宅一生、磯崎新など日本人クリエイターとの交流も深く、その生き様は多くのアーティストからリスペクトされている。1999年、牟礼のアトリエがイサム・ノグチ庭園美術館として公開。2014年、ニューヨークのノグチ財団によりイサム・ノグチ賞が創設され、杉本博司、ノーマン・フォスター、谷口吉生、安藤忠雄、深澤直人、千住博、川久保玲、蔡國強らが受賞している。



12. ©朝日新聞社



イサム・ノグチ庭園美術館 イサム家  
撮影：齋藤さだむ

# 第1章 彫刻の宇宙

1940年代から最晩年の1980年代の多様な作品を紹介します。ノグチの半世紀を超える制作活動の中核には、「彫刻とは何か?」「彫刻にできることとは何か?」という問いがありました。その生涯は数多くの「人・もの・歴史」との出会いと学びに彩られています。創造へと導かれる彼の「気づき」は、常に予期せぬ発見の驚きと喜びにあふれたものでした。運命的な出会いによって明示される未踏の道—彫刻芸術のあらたなる発見の道—をノグチは強い意志の力によって歩いていきました。本章では、ノグチのライフワークである太陽と月に見立てた光の彫刻「あかり」の大規模なインスタレーションを展示室の中心に据え、《化身》(1947年)、《黒い太陽》(1967-69年)、《ヴォイド》(1971/80年)など、様々な展開をみせるノグチの「彫刻の宇宙」を500㎡の回遊式の会場で体感していただきます。



11. 「AKARI CLOUD」インスタレーション

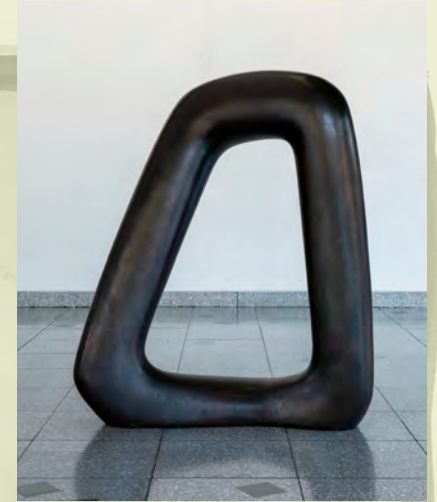
Photo: Nicholas Knight ©The Noguchi Museum /ARS

1951年、岐阜提灯から発想を得て制作が始められた「あかり」は、和紙を通した柔らかな光そのものを彫刻とする、ノグチのライフワークとなったシリーズです。本章では150灯もの「あかり」によるインスタレーションを展示室の中心に据え、周囲に各年代の作品を配し、回遊式の会場を構成する予定です。イサム・ノグチ財団・庭園美術館(ニューヨーク)での展示風景(2018-19年)



1. 《黒い太陽》1967-69年 スウェーデン産花崗岩 国立国際美術館蔵

シアトルに設置されている同名作品の習作です。《黒い太陽》は、石匠の和泉正敏による本格的な制作のサポートが始まった記念碑的な作品であり、ノグチの代表作。本作はシアトルの小型版であり、石の産地は異なりますが(シアトルのものはブラジル産)、エネルギーの塊のような共通する魅力にあふれています。



3. 《ヴォイド》1971年(铸造1980年) ブロンズ

和歌山県立近代美術館蔵 撮影:齋藤さだむ  
仏教用語で「すべてのものの存在する場所」という意味をもつヴォイド(虚空)。この禅的なイメージに魅了されていたノグチは、1970年から様々な素材とサイズにより同名の連作を手がけました。実現には至りませんでした。高さが10mを超える巨大な《ヴォイド》を反核の象徴として制作したいとも望んでいました。



4. 《化身》1947年 ジョージア産桃色大理石 クレラー=ミュラー美術館蔵

Photo:Victor Nieuwenhuijs

シュルレアリスムの影響が色濃い本作は、1940年代半ばから始められた「インターロッキング・スカルプチュア(複数のパーツの組合せ彫刻)」を代表する作品です。主題は現世に現れたヒンドゥー教の神の化身です。大理石の微妙な色合いは血の通う皮膚を思わせます。淡い桃色の石はノグチが晩年まで好んだものでした。

イラスト:筒井萌(本展ロビー階展示プラン)

## 第2章 かるみの世界

ノグチは肉親との関係に葛藤があり、特に詩人であった父親の米次郎とは複雑な間柄でした。しかしその祖国である日本は、ノグチに彫刻芸術の可能性への道筋を与え続けた「親しき国」でした。彫刻の起源を追い求め、ヨーロッパ、南米、アジアとフィールドワークを重ねた旅のなかで、常に「創造への糧」となる学びをやめなかったノグチにとって、父の故郷は、平明さの中に深い哲学を内包し、晩年にいたるまで彼を覚醒してやまない伝統と文化をもつ国だったのです。なかでも日本の文化の諸相がみせる「軽さ」の側面は、ノグチが自らの作品に取り込むことに情熱を傾けた重要な要素でした。本章では、切り紙や折り紙からのインスピレーションを源泉に制作された金属板の彫刻、円筒形の「あかり」のヴァリエーション、そして真紅の遊具彫刻《プレイスカルプチュア》(1965-80年頃/2021年)により、ノグチの「かるみ(軽み)の世界」をご紹介します。



10. 《プレイスカルプチュア》1965-80年頃、鋼鉄 (イサム・ノグチ財団・庭園美術館(ニューヨーク)での展示風景。本展では新規制作して展示) Photo: Nicholas Knight

ノグチは生涯を通じて遊園地の建設プランをもっていました。子供たちがその空間を自由に駆け回り、遊びを通じて「世界との出会い」が育まれることを切望していたのです。ノグチは大型遊具の制作も手掛けています。色鮮やかで力強く、かつ軽やかなフォルムには、ノグチの情熱と揺るぎない信念が込められているかのようです。



6. 《坐禅》1982-83年 溶融亜鉛メッキ鋼板  
イサム・ノグチ財団・庭園美術館(ニューヨーク)蔵  
Photo: Josh White /JWPictures

高温の炎で切断した鋼板を組み合わせ、亜鉛メッキした連作の一点。紙を扱うような自由な発想で、ユニークな構成が試みられています。本シリーズの作品に対し、ノグチは《雨の山》、《雲の山》、《マグリットの石》、《宇宙のしみ》、《ジャコメッティの影》(すべて本展出品作)といった詩的なタイトルを付けています。



7. 《リス》1988年 ブロンズ 香川県立ミュージアム蔵  
本作の約30年前、自身の作品に「現代性」と「軽さ」を望んだノグチは、金属の板を用いた制作に初めて着手しました。素材の扱いに苦心したというノグチは、彫刻のもつ「重さと物質性を否定したかった」と後に語っています。本作は最晩年に取り組まれたそのヴァリエーションといえるものです。

## 第3章 石の庭

制作拠点であったニューヨークと香川県牟礼町には、現在、イサム・ノグチ庭園美術館が開館しています。ノグチにとって「庭園」とは、自らの彫刻の在り方を考えるうえで、最も大切なキーワードでした。とりわけ牟礼は野外アトリエがそのまま公開されていますが、そこは単なる仕事場の領域を超えた、自らの感覚と世界がつながることのできる「特別な空間」でした。四季折々の風光が味わえる豊かな自然環境のもと、未完の作品を含め、あらゆるものが照応しあうアトリエは、空間全体がノグチにインスピレーションを与え、それ自体が作品と言い得る、聖性と啓示にみちた小宇宙＝庭だったのです。

「石の庭」は、牟礼に残された最晩年の複数の石彫により、美術館で展示を行う初めての試みです。終章では、長い発見の道行きの到達地である牟礼のアトリエのエッセンス、その空間の味わいに追いつき、ノグチ芸術の精髓を体感いただける場を立ち上げたいと考えています。



2.《ねじれた柱》1982-84年 玄武岩 イサム・ノグチ財団・庭園美術館(ニューヨーク)蔵(公益財団法人イサム・ノグチ日本財団に永久貸与) 撮影:齋藤さだむ  
手を加えつつ、石本来の要素を残すという類例のない制作を展開したノグチについて、建築家の磯崎新は次のように語っています。「牟礼にきて、自然石と向き合うようになって、イサムさんのなかに大変革が起こったのだと私は考える。(中略)石の声をはじめてに聞く。簡単なことに思えるけれど、そのとき自己の内部を無にしておかねばならない。これは世界が転換するほどの解脱(げんたつ)ではじめて到達できる」。  
\*磯崎新「イサム・ノグチ 石の声をはじめてに聞く」、『挽歌集—建築があった時代へ』、白水社、2014年



9.《無題》1987年 安山岩 イサム・ノグチ財団・庭園美術館(ニューヨーク)蔵(公益財団法人イサム・ノグチ日本財団に永久貸与) 撮影:齋藤さだむ  
見る位置によって姿が大きく変わる最晩年の作品です。自然の摂理の賜物である石の原形(エレメント)が明らかにされるがごとく、優美なフォルムが見事に彫り出されています。大小二つの石の組合せに見えますが一つの石から成ります。野外アトリエの傍に建つ、江戸時代の豪商宅を移築し、ノグチが牟礼での住まいとした「イサム家」の庭に置かれています。



8.《フローアロック(床石)》1985年 玄武岩 イサム・ノグチ財団・庭園美術館(ニューヨーク)蔵(公益財団法人イサム・ノグチ日本財団に永久貸与) 撮影:齋藤さだむ  
多面体を構成する直線と曲線の絶妙な組み合わせからなる本作は、二つの石が間隔を空けて置かれています。丁寧に研磨された石肌は深みのある墨茶色であり、刃文のような模様が浮かんでいます。晩年の作品のなかでも一種独特の造形的な緊張感に満ちた本作からは、妥協を許さぬノグチの厳しい審美眼が感じられます。

イラスト:筒井萌(本展2階展示プラン)

# 類例なきコラボレート

## ——イサム・ノグチと和泉正敏

1964年、ノグチは日本での滞在中、香川県牟礼町で代々続く石材店「和泉屋」の三男である石匠の和泉正敏（1938—/現・公益財団法人イサム・ノグチ日本財団理事長）と出会います。ノグチ59歳、和泉25歳の時のことでした。若いながらも腕の立つ和泉のセンスを見込んだノグチは、その後、《黒い太陽》（1969年、シアトル市蔵）をはじめ、様々な石の作品の制作を任せ、同地に野外アトリエと住まいを構えるに至ります。

二人の仕事における関係は、単なる師弟のそれとは異なる、類例なきコラボレートと呼ぶべきものでした。ノグチが和泉であり、和泉がまたノグチであるような、稀にみる協働関係の下、制作が進められていったのです。そして和泉との出会いは、ノグチにとって彫刻家としての最大の転換をうながすものとなりました。現在、牟礼のアトリエは、イサム・ノグチ庭園美術館として公開されています。同館のミッションは、ノグチ生前のままの環境を維持することであり、残された作品とともにノグチ芸術の聖地というべき無比の空間を今に伝えています。



制作中のイサム・ノグチと和泉正敏 1970年  
Photo: Michio Noguchi

# イサム・ノグチ 発見の道



5.《発見の道》1983-84年 安山岩 鹿児島県霧島  
アート・森蔵 Photo: Kevin Noble  
晩年に至り、石へ最小限の手を加えるという独自の表  
現領域を展開していったノグチの生涯は、実に数多く  
の運命的な出会いと創造への糧となる学びに彩られ  
ていました。「発見の道(Ways of Discovery)」とは、  
自らの道程への深い感慨を作品の名に込めたもの  
だったのでしょか。  
本展タイトルはこの作品をもとにしています。第1章で  
展示の予定です。

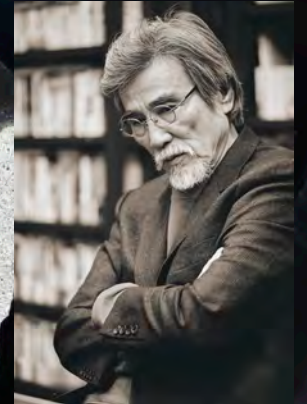
## Message

みなぎ  
ノグチ作品に漲る圧倒的なまで  
の緊張感、溢れ出る生命力。  
その真髓に触れる絶好の機会  
だろう。(安藤忠雄・建築家)



撮影：関野欣次

石に語らせ、光をひそめ、  
セカイの<sup>ひびき</sup>軛を解き放つ。  
イサム・ノグチが、ここにいる。  
(松岡正剛・編集工学研究所所長)



撮影：山本遼

〈フロアーロック(床石)〉(部分)  
撮影：齋藤さだむ



# イサム・ノグチ 発見の道

## Isamu Noguchi: Ways of Discovery

会期:2021年4月24日(土)―8月29日(日)

会場:東京都美術館 企画展示室

〒110-0007 東京都台東区上野公園8-36 <https://www.tobikan.jp>

\*新型コロナウイルス感染症拡大防止に関する取り組みについては、東京都美術館ウェブサイト(上記)をご確認ください。

休室日、開室時間、観覧料:詳細は決まり次第、展覧会公式サイト等でお知らせします。

主催:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館、朝日新聞社、NHK、NHKプロモーション

協賛:DNP大日本印刷、三菱商事

特別協力:イサム・ノグチ財団・庭園美術館(ニューヨーク)、公益財団法人イサム・ノグチ日本財団 イサム・ノグチ庭園美術館

協力:茨城放送

展覧会公式サイト:<https://isamunoguchi.exhibit.jp/>

展覧会公式ツイッター:@IsamuNoguchi21

展覧会公式Facebook:@IsamuNoguchi21

お問い合わせ:03-5777-8600(ハローダイヤル)

\*展示作品・会期・開室時間等については、今後の諸事情により変更する場合がありますので、本展特設展覧会公式サイト等でご確認ください。

報道関係お問い合わせ先

「イサム・ノグチ 発見の道」広報事務局(共同PR内)担当:三井、安田

Mail:[isamunoguchi.exhibit-pr@kyodo-pr.co.jp](mailto:isamunoguchi.exhibit-pr@kyodo-pr.co.jp)

Tel:03-3575-9823(平日のみ10時-16時)

Fax:0120-653-545



イサム・ノグチ庭園美術館 撮影:齋藤さだむ

©2020 The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum/ARS, NY/JASPAR, Tokyo E3713